【7】頭陀行に関するエピソードの検討

［0］摩訶迦葉は弟子たちの中で頭陀行第一と称される。「頭陀第一」という称号は必ずしも古い原始仏教聖典の中には見いだせないが、しかし摩訶迦葉が頭陀行のような厳しい修行をする修行者であったことは、すでに原始聖典時代から確立していた伝承であった。前節の最後に記したように、それが故に彼は釈尊の弟子たちの中では異色の人物であって、必ずしも一般の弟子たちにはよく知られていなかった。それにもかかわらず、喪主を務め、第一結集を主宰したのは、それなりの理由があったからであろう。考えられるその理由は、前節において考察したように、釈尊と摩訶迦葉は修行仲間であって、釈尊が成道して布教活動を開始する以前からの旧知の間柄で、しかも肝胆相照らしあっていたこと、そしてもう一つは釈尊が教化を開始し、サンガを形成するようになって捨てざるをえなかった頭陀行的なインド伝来の修行方法を厳守していて、釈尊はその面でも一目を置いておられたからであろう。この節では、摩訶迦葉の頭陀行に関するすべてのエピソードを検討する。

［1］まず頭陀第一という呼称資料を紹介する。

［1-1］摩訶迦葉が釈尊の弟子たちの中で頭陀行第一であったとするＡ文献には次のようなものがある。

〈18-1〉 *AN.*；私の声聞比丘の中で第一（etad aggaṃ mama sāvakānaṃ bhikkhūnaṃ）の頭陀を説く者は（dhutavādānaṃ）摩訶迦葉である。

〈18-2〉『増一阿含』；我聲聞中第一比丘十二頭陀難得之行所謂大迦葉比丘是

〈22-1〉『増一阿含』；我弟子中第一比丘頭陀行者所謂大迦葉是

〈24-2〉『増一阿含』；名曰迦葉今日現在頭陀苦行最爲第一

〈29-4〉 *Theragāthā*；私は頭陀の徳において勝れ（dhutaguṇe visiṭṭho 'haṃ）、大牟尼（釈尊）をおいて（ṭhapayitvā mahāmuniṃ）私に等しい者は存在しない（sadiso me na vijjati）。

［1-2］Ｂ文献には次のようなものがある。

〈18-1〉 MN.-A.；私の声聞・比丘たちの間で頭陀行を説く者の第一は摩訶迦葉である（mama sāvakānaṃ bhikkhūnaṃ dhutavādānaṃ yadidaṃ mahākassapo）。

〈14-6〉『根本有部律』「薬事」；佛已記我爲第一於杜多中最爲上

〈18-3〉『仏本行集経』；諸比丘中少欲知足頭陀第一摩訶迦葉比丘是也

〈18-4〉『阿毘曇八犍度論』；我弟子中第一比丘少欲頭陀摩訶迦葉

〈24-4〉『大毘婆沙論』；釈迦牟尼佛杜多功徳弟子衆中第一大弟子迦葉波

［1-3］大乗経典や中国撰述文献には次のようなものがる。

『大宝積経』（大正 11　p.558 上）；世尊記大徳頭陀人中最為第一。

『大方等大集経菩薩念仏三味分』（大正 13　p.840 上）；我親従佛聞如是説。我弟子中頭陀第一則大迦葉其人也。

『仏説弥勒下生経』（大正 14　p.422 中）；迦葉今日現在頭陀苦行最為第一。

『仏説弥勒下生成仏経』（大正 14　p.425 下）；釈迦牟尼佛於大衆中常所讃歎頭陀第一。

『仏説弥勒大成仏経』（大正 14　p.434 上）；大迦葉比丘是釈迦牟尼佛於大衆中常所讃歎頭陀第一通達

禅定解脱三昧。

『仏説未曾有正法経』（大 15　p.444 上）；尊者迦葉於声聞中耆年有徳佛所称讃頭陀第一。

『大智度論』（大正 25　p.078 中）；摩訶迦葉行阿蘭若少欲知足行頭陀比丘中第一。

『大智度論』（大正 25　p.139 中）；大迦葉耆年旧宿行十二頭陀法之第一。

『大智度論』（大正 25　p.188 中）；大迦葉汝最耆年行頭陀第一。

『大智度論』（大正 25　p.354 下）；摩訶迦葉行十二頭陀第一。

『妙法蓮華経文句』（大正 34　p.010 中）；増一阿含。佛法中行十二頭陀難行苦行大迦葉第一。

『大方広仏華厳経疏』（大正 35　p.913 中）；頭陀第一揀餘迦葉故云大也。

『阿弥陀経疏』（大正 37　p.315 下）；佛弟子中頭陀第一。佛当見来分座令坐 。

『仏説阿弥陀経要解』（大正 37　p.366 上）；頭陀勝行第一伝佛心印為西土初祖。

『維摩経略疎』（大正 38　p.608 下）；大迦葉頭陀苦行第一。

『維摩経義疏』（大正 38　p.938 下）；於十弟子内苦行第一。

『維摩経略疎垂裕記』（大正 38　p.786 中）；大迦葉汝最耆年行頭陀第一。

『首楞厳義疏注経』（大正 39　p.830 上）；尊者頭陀上行第一故云大也。

『浄名経集解関中疎』（大正 85　p.457 上）；大迦葉少欲行頭陀中第一也。

［2］以上のように摩訶迦葉は「頭陀行第一」として賞賛されるのであるが、これについてのエピソードを見てみよう。

［2-1］摩訶迦葉が具体的にどのような生活をしていたのかは判らないが、一般的に頭陀行はパーリでは 13 頭陀支（terasa dhutaṅgāni）と呼ばれ、糞掃衣支（paṃsukūlikaṅga）・但三衣支（tecīvarikaṅga）・常乞食支（piṇḍapātikaṅga）・次第乞食支（sāpadānacārikaṅga）・一坐食支（ekāsanikaṅga）・一鉢食支（pattapiṇḍikaṅga）・時後不食支（khalupacchābhattikaṅga）・阿蘭若住支（āraññikaṅga）・樹下坐支（rukkhamūlikaṅga）・露地住支（abhokāsikaṅga）・塚間住支（sosānikaṅga）・随処住支（yathāsanthatikaṅga）・常坐不臥支（nesajjikaṅga）の 13 項目が上げられる（*Visuddhimagga*　p.59）。漢訳では〈20-1〉『増一阿含』、〈25-1〉『増一阿含』に説かれているものがその例である。前者は 12 項目、後者は 11 項目を挙げる。そしてこれらは摩訶迦葉がこれらを行じる者であるとしている。

［2-2］十三頭陀支や十二・十一頭陀支を、簡単にまとめれば糞掃衣・乞食・樹下坐・陳棄薬という四依法による生活や「少欲知足」ということになる。〈29-2〉*Theragāthā* には四依法、〈2-1〉*MN.*、〈2-2〉『中阿含』、〈2-3〉『増一阿含』には摩訶迦葉が林住（āraññaka）・乞食（piṇḍapātika）・糞掃衣（paṃsukūlika）・三衣（tecīvarika）・小欲（appiccha）・知足（santuṭṭha）・五分法身といった項目をほめたたえたとされている。また〈4-1〉*SN.* は「この迦葉は自分が得たどのような衣にも、どのような鉢食にも、どのような床座にも、どのような薬・資具にも満足する者である」としている。B 文献でも〈*2-1*〉『生経』は「知止足・少求」、〈*18-2*〉『根本有部律』は「少欲知足修杜多行」、〈*24-1*〉『根本有部律』「雑事」は「杜多少欲知足」とする。

［2-3］頭陀行のなかで摩訶迦葉を象徴するのは糞掃衣である。それを語るエピソードの第一は、釈尊が摩訶迦葉に「汝は年老いた。糞掃衣は重いから家主の衣を着、請ぜられたる

を食し、我が傍に住せよ」といわれたとする〈8-1〉*SN.*、〈8-2〉『雑阿含』、〈8-3〉『別訳雑阿含』、〈8-4〉『増一阿含』、〈8-5〉『増一阿含』である。これに対して摩訶迦葉は「私は長い間、阿蘭若に住し、乞食をし、糞掃衣と三衣を着、少欲知足を賛嘆してきました」と答えて頭陀行を続けることを宣言し、釈尊はこれを讃めたとされる。この話はそのままＢ文献の〈*8-1*〉『根本有部律』、〈*8-2*〉『僧伽羅刹所集経』、〈*8-3*〉『仏本行集経』、〈*43-1*〉『根本有部律』にも継承されている。

さらには『法華文句記』（大正 34　p.172 中）が「時迦葉乞食前至佛所却坐一面。佛言、汝年老長大志衰根弊可捨乞食及十二頭陀、亦可受請并受長衣。迦葉曰、我不従佛教」とし、『妙法蓮華経文句』（大正 34　p.010 上）が「後時佛語汝年高。可捨乞食帰衆受食。可捨重糞掃衣受壊色居士軽衣。迦葉白佛佛不出世我当為辟支佛終身行頭陀。我今不敢放所習更学餘者。又為当来世作明。未来世言上座迦葉為佛所歎。我亦当学難行苦行。佛言善哉。是為行大」とし、『仏祖統紀』（大正 49　p.169 下）が「佛言善哉。若迦葉行頭陀行在世者。我法久住。迦葉頭陀既久。髣長衣弊。来詣佛所。諸比丘皆起慢心。佛分半座令坐。迦葉不肯。佛即広讃迦葉功徳。與我不異」とするように、中国撰述の文献にも伝えられている。

そしてこのような伝承と、後に述べる摩訶迦葉が世尊の着ておられた糞掃衣と自分の柔らかな衣とを交換したというエピソードは関係を有するであろう。

このように摩訶迦葉の着ているものは糞掃衣で重かったというイメージがあるためであろうか、〈35-1〉*Vinaya*、〈35-2〉〈35-3〉『十誦律』の「不失衣界設定」制定の因縁や、《36》*Vinaya* の疎に縫うことの許可の因縁、《38》『四分律』の「長衣戒」（捨堕 001）の制戒因縁、〈41-1〉『五分律』、〈41-2〉『僧祇律』の「謗廻衆利物戒」（『五分律』堕 080）制定の因縁など、衣に関する規程が定められる至った因縁に摩訶迦葉が登場する頻度が高い。

［2-4］また摩訶迦葉の頭陀行を象徴するもう一つのエピソードは貧民窟に乞食したり、ハンセン病患者の布施する指の落ちた食べ物を食べたとするものであろう。それが〈27-1〉*Udāna*、〈27-2〉*Theragāthā* であり、Ｂ文献の〈*28-2*〉『根本有部律』「薬事」、〈*18-5*〉『賢愚経』に継承されている。

大乗では『注維摩詰経』（大正 38　p.347 下）の「迦葉聞是已常学佛行。慈悲救済苦人」、『仏説維摩詰経』（大正 14　p.522 上）の「憶念我昔於貧聚而行乞」、『維摩詰所説経』（大正 14　p.540 上）の「憶念我昔於貧里而行乞」、『説無垢称経』（大正 14　p.562 上）の「憶念我昔於一時間。入広厳城遊貧陋巷而巡乞食」、『仏説摩訶迦葉度貧母経』（大正 14　p.761 下）の「何所貧人吾当福之。即入王舎大城之中。見一孤母。最甚貧困……」、『分別功徳論』（大正 25　p.030 中）の「時迦葉適欲至貧家。福度諦念正欲現天身。懼恐不受我施。便於中路現作草屋。羸病在中。迦葉従乞。病人即申手施食。迦葉以鉢受之」、『仏説弥勒下生成仏経』（大正 14　p.425 下）の「常愍下賤貧悩衆生。救抜苦悩令得安隠」などというイメージなっている。これは後に述べるように、摩訶迦葉は大富の婆羅門の家から出家して少欲知足に徹したというイメージによるものであろう。

そして〈6-1〉*SN.*、〈6-2〉『雑阿含』、〈6-3〉『別訳雑阿含』、〈6-4〉『月喩経』、〈7-1〉*SN.*、〈7-2〉『雑阿含』、〈7-3〉『別訳雑阿含』に見られるように、釈尊が摩訶迦葉を乞食の模範とせよと説教されたというエピソードにもつながった。

また極端であるが、〈40-1〉『五分律』では摩訶迦葉は地に落ちている食べ物を食べて、犬のようだと譏られたとされている。

［3］以上のように摩訶迦葉は頭陀行を励んだとされるが、その周りには〈3-1〉*SN.*、〈3-2〉『雑阿含』、〈3-3〉『増一阿含』から知られるように、それに共感するたくさんの頭陀行を行じる比丘たち（bhikkhū dhutavādā）がいたであろう。

しかし摩訶迦葉やそれに共感する頭陀行者たちは、釈尊の弟子の中では少々敬しつつも遠ざけられるような存在であったかも知れない。サンガのシステムが整った時には、 本来四依法は出家沙門の原則的な生活方法であったにも拘わらず、出家具足戒を受ける前に誦してはならないと定められた。具足戒を受ける前にこれを誦すと、怖じ気をふるってせっかくの出家の意志を捨てる恐れがあるためである。したがって具足戒を受け終わって比丘になってから誦される。このことはあくまでも精神的な心構えあるいは目標であって、これを遵守しなければならないということはないということを意味する。提婆達多が「命あるかぎり阿蘭若者（āraññaka）であるべきで村に入れば罪とすること、命あるかぎり乞食者（piṇḍapātika）であるべきで招待食を受ければ罪とすること、命あるかぎり糞掃衣者（paṃsukūlika）であるべきで居士衣を受ければ罪とすること、命あるかぎり樹下住者（rukkhamūlika）であるべきで覆いのあるところに近づけば罪をすること、命あるかぎり魚肉を食しないで（macchamaṃsaṃ na khādeyyuṃ）魚肉を食すれば罪とすること」という五事（pañca vatthūni）を主張したとき、釈尊はこれを退けられて、前の３つについてはもし欲するならばそうしなさい（yo icchati āraññako hotu……）、（雨期を除く）８ヶ月樹下坐すること、自分のために殺されたと見ない・聞かない・疑いがない魚肉は食することを許されたということで明白である(1)。

しかし釈尊も出家して６年間の苦行の期間はもちろん、成道してしばらくの間は頭陀行的な生活をされていたものと考えられる。初転法輪の場所は仙人堕処鹿野苑と呼ばれるように、バラモン教の仙人のような修行者が住むところであって、当然のことながら釈尊も五比丘たちもそのような生活をされていたはずである。その後釈尊はウルヴェーラーに帰られて三迦葉の教化に当たられ、象頭山（Gayāsīsa）に移ってからもしばらくの間は彼らとともに生活された。彼らは螺髻梵志と呼ばれるバラモン教の仙人的な修行者であったから、その生活は頭陀行的なものであったと思われる。

おそらく釈尊の生活様式が変わったのは、王舎城にビンビサーラ王の外護を得て竹林園が造られ、たくさんの弟子ができて、そこで和尚と弟子の制が作られ、やがてサンガとして発展していった、その後のことであると考えられる。

この和尚と弟子という師弟関係を基礎とするサンガは、やがて寺院の生活という様式に変化していった。それは自ずから頭陀行的な生活とは異なるものであって、もしサンガの生活を常態とする比丘を新しいタイプの修行者と称するなら、摩訶迦葉のような修行者は古いタイプの修行者であったであろう。

摩訶迦葉には釈尊から半坐を分かたれたという有名なエピソードが存する。これは《12》が伝えるもので、摩訶迦葉は久しく舎衛国の阿練若処に住していたので「長鬚髪著弊納衣」で、祇樹給孤独園の世尊のところにやって来た。それを見て比丘たちは摩訶迦葉に軽慢心を起こした。それを知った世尊は比丘たちに摩訶迦葉の偉大さを証明するために座席の半分を譲られたとされるものである。このエピソードには摩訶迦葉は釈尊と同じころに出家して、同じような禅定の境地を得ているという話も含まれるから、摩訶迦葉を釈尊と同じ地位にあ

るものと見なすという意味合いが含まれるのであろう。これについての詳しい分析は本「モノグラフ」に掲載した岩井昌悟研究分担者の【論文 9】「『半座を分かつ』伝承について」に譲るが、ともかくこのエピソードに現われているように、摩訶迦葉のような修行者は新しい修行者から見ると少々異端じみていて、敬して遠ざけられるような存在ではなかったであろうか。まさしく辟支仏的な存在であったわけである。釈尊はそういう古いタイプの修行者も尊重しなさいとわざわざ教えなければならないようなことになっていたのである。

〈8-4〉『増一阿含』は摩訶迦葉が老年であって糞掃衣を重かろう、だから居士衣を着てはどうかと釈尊が勧められたという資料の一つであるが、ここで摩訶迦葉は「若當如來不成無上正眞道者我則成辟支佛。然彼辟支佛盡行阿練若、到時乞食不擇貧富、一處一坐終不移易。樹下露坐或空閑處、著五納衣或持三衣或在塚間或時一食或正中食或行頭陀。如今不敢捨本所習更學餘行」と断ったとされている。これはそれほど信頼できる資料ではないが、「もし如来が無上正眞道を成じられなかったとするならば、私は辟支仏となって頭陀行を行じたことでしょう。もとやって来たことを敢えて捨てて余行を学ぶつもりはありません」と言ったとされる。すでに何度も記してきたように、摩訶迦葉の頭陀行は彼の遊行生活の生活方法であり、彼は釈尊の弟子となってからも、このような生活を続けたのである。

（1）*Vinaya*「破僧犍度」（vol. II　p.196）。『四分律』「破僧揵度」（大正 22　p.909 中）は乞食、糞掃衣、露坐、不食酥鹽、不食魚肉の 5 事、『十誦律』「調達事」（大正 23　p.259 上）は著納衣法、乞食法、一食法、露地坐法、断肉法の 5 法、『根本有部律』「破僧事」（大正 24　p.149 中）は、食乳酪、食魚肉、食塩、受用衣時截其縷績、住阿蘭若処の５法とする。